寄　稿

# 農業・農村におけるＩＴ活用の原点は現場情報

農業技術研究機構・中央農業総合研究センター
分散コンピューティング研究室長　二宮正士

農林水産省は平成十三年四月、「二十一世紀における農林水産分野のＩＴ戦略」のとりまとめを公表した(http://www.maff.go.jp/soshiki/kambou/joho/it-sen/it-sen.htm)。そこに示された重点政策には三本の柱がある。第一に情報の電子化の推進や利活用システムの充実、つまり実際に現場で使えるデータやシステム、プログラムを整備して、(1)企業的経営の支援、(2)電子商取引の推進と消費者への情報提供の充実、(3)農山漁村地域の利便性の向上、(4)資源管理の高度化、を計ること、第二に農山漁村地域に地域の実情に即したＩＴインフラを整備すること、第三に高度な情報処理能力の習得への支援や継続的サポート態勢の整備等で情報リテラシー問題を解決することが謳われている。

農業・農村情報化施策は既に十年以上前に始まったが、どうしても従来型のハードウエア優先だったために、あまり成果が上がってこなかったことを考えると、今回の戦略はソフトウエアの重要性を前面に出している点で、これまでに無い画期的なものである。最近しばしば報道されるように、隣国韓国の情報化の進展にはすさまじいものがあるが、高速ネットワーク等の情報インフラと、データの電子化やコンピュータ教育推進などのソフトウエアをバランス良く整備しているところに大きな特徴がある。農業分野も例外ではなく急速にソフトウエアが充実しているが、我が国の現状と比べるととても羨ましく、また焦りを感じていた身としては、今回提示された戦略にひとまずほっとしている。

ところで、情報化というとつい難しいことを考えてしまうが、実は身近なところに原点がある。自分自身での地道なデータ収集である。例えば、収穫時期や収穫量といった生育予測は企業的経営に必須の情報であるが、作物生産は気象、土壌、水、栽培方法などと複雑にからみあっているため、あまりに条件の組み合わせが多く、どんな場合にも使えるような予測システムを開発することは、今のところ事実上不可能である。生育予測に限ったことではないが、実は、コンピュータさえあればなんでもできると幻想をもってしまったのも、農業・農村の情報化が立ち後れた大きな原因だろう。

結局は、自分の圃場で生育量データなど地道に記録し、既存の予測モデルを自分用に調整することを繰り返して初めて使い物になる予測モデルを手に入れることができる。生育データばかりではない。労働時間や機械の稼働時間、農業資材購入量、出荷・販売量などさまざまな情報を電子データとして蓄積して初めて、コンピュータに活躍の場を与え、ひいては経営を効率化することができるようになる。家計簿をきちんと付ければ、家計を見渡すことができるようになり家計の健全化を助けるのと話は全く同じことだろう。

実はこの地道な作業がなかなか実現しない。きつい農作業のあとにデータ入力などなかなかかなわないし、第一この地道な作業の成果が見えるまでへたをすると何年もかかってしまう。しかし、繰り返すが、地道な現場データの収集は情報化した効率的企業的経営を実現するために避けては通れない。このことが、簡便に現場情報を蓄積できるようなデータ収集システム開発を我々の研究開発の大きな目標の一つとして掲げている理由である。音声認識やバーコード活用、インターネット携帯電話の応用など低コストで実現できるシステムを狙っている。